

白雪の所もわかすふりしけはいはほにも咲く花とこそ見れ

(古今)

○炭流(すみがま)

すみがまは山の片をば又峯などに穴をほりかまをぬりて薪をつめて焼く物にて、冬になれば烟も立ちのぼれる様を、よそより見やりてよむなり、寒氣の強き年は、烟も多く立ちまざる由をよむ、或は松の木の間より、一筋立のぼる烟を見、雪の上に烟たなびくとも、烟の末は、雪けの雲かともよめり、又寒さを急ぐ小野の炭やきとも、時雨をくだす空のけしきかと思れば、炭がまの烟のたちけるなど疑ひ、雪けの雲にまがへなごすべし、●山城の小野山、大原山などは、名だかき名所なり

(題) すみがま すみやま けぶり うきわざ 深山人 炭木

●こりつむ やく 立てそふ こりくへ

(句) 小野山や こり埋む 木と天に 顯はれぬ 小野山に 山に立つ 炭焼の 冬山の なれぬとて すみやま 雪深み 雪ふりて 薄烟 絶す立つ 小野人の すくけたる それとみて 横たかみ こりつみて あさなく こりくふる 立つ烟 山ふかく 里人の 市にうる 色そへて ますらをが 焼さそへて 一筋に靡しなり にははへる 烟こそ夕

烟 なびくなり よそながら 知られける けをぬるみ けは火氣

●谷の炭がま 炭やく頃は 烟たてそふ すみやく里の 炭がまの山 寒さをねがふ 炭やく峯の すみやく業の たきき取りたく 烟にむせぶ やく炭がまに 年の寒きに 妻木こりくへ 烟をたぬ 口やあくらむ けぶりの高く 立ち昇る哉 烟をみてぞ 炭の小車 都に出る 遠山けぶり 民の往來も 炭焼衣 人も通はぬ 真木の炭がま 烟たゆらむ たちみたすみ 松の炭がま 立つ烟哉 あたりの空を 外の烟も ま木の炭がま 炭焼く翁 炭やきぬの すまけにぞ知る いかによけばか 横山炭の 和泉な 冬は炭木を こりやそふらむ 烟に月の すまけぬる哉 烟の末も 小野の山風 雪ふきおろす 烟ばかりを 烟たねせぬ 小野の山里 あさな夕なに 寒さをこふる 烟にくもる 小野の炭焼 山より奥の かすむ炭がま 炭賣る市に 雲に色そふ なびく烟の 薄き烟の 賤がすさびの 木の間につぶる 烟にしるく 雪より烟る 今日はやさそ 細き烟は 雪にとぢたる 烟ふさしく あらし やがて雪けの 雲となりけれ 烟のみして 雪の村消

(名所) 小野山 (山城) 八瀬 (全) 小盤山 (全) まきのを山 (全) つくは山 (常陸)

(作例) 谷深く焼く炭がまの烟だに峰の雲とはならぬもかは (万代)

よそながら立つ烟にぞしられける大原山のまきの炭がま

(月)

炭がまに立つ烟さへ小野山は雪消の空とみゆるなりけり
こりつみて横の炭焼けをぬるみ大原山の雪のむらぎね
山ふかみ焼く炭がまの烟こそやがて雪げの雲となりけれ

(金葉)
(後拾)
(詞華)

○埋火(うづみび)

埋火とは盛火の事にて、其火は灰に埋むよりいふ、埋火のあたりは、春のこゝちすともいひ、曉方の埋火も消て、袖寒き由をいひ、又身の埋れながらあるかなさかの由をもよそへよむべし、●埋火の霜とは上にたまりたるジャウをたとへいふ、挿おこすとは火を起すを、人を起すになぞらへていふ、ほたのうづみびとは、山里などにて、木のほたを灰にさし埋みたるをいふ、●けたもの炭とは支那の羊琇といふ人が、獸形の炭をたきて、客に供せし事よりいふ、類題に夜もすがら人こそとはねけたもの炭の火をのみ我友にしてとよめり

(語) うづみび 火桶 すびつ 灰 炭 ほたの火

●おこす こがる、きゆる 炭さす

(句) 窓の内の ふけぬるか 夜もすがら かたる間に 下にのみ けぬばかり むつ語り

ほたの火 手すさびに ふくる夜の 小夜中に ふきおこす 夜と共に 心ちして おこす哉 圓居して さむしろに 睦じき 小夜ふけて 横の戸の ひま多き 圍寒き 幾度か 山がつの ほたはたの火の 灰の色は
●ねさめの友と さながら春の 心ちこそすれ 埋火の霜 灰かきならし 霜夜もしらぬ炭さしそへて さわ通る夜は ねられぬ夜は 炭がちになる 寒さ忘るゝ 嵐も知らぬ消ぬ光は 残り少く 圍の埋火 霜夜も知らぬ 向ふ埋火 冬の圓居に ふせこの下の埋火のもと 夜ぶかく向ふ 語らひふかす 柴の埋火 埋れてのみ 窓の埋火 かたらひふかす 灰のてすさび 夜寒忘る夜 さゆるも知らず 埋火の灰 埋火さむく 灰の下なる おきの下にて たきすさびたる 頼むよなく 圍の寒さに くぬ木の枯葉 ほのかに向ふ 色にこがる、さながら春の 春かと思ふ 上はつれなき 埋火の又かさおこす 炭の火をのみ 吾友にして 人をも起す 夜半の埋火 柴折りくぶる 消ぬぬばかりに きゆるにつけて すき間知られて 下にはもわて 灰しらみ行く 世の春しらぬ さわぬばかりを

(作例) 埋火をあはれとぞみる夜もすがらさこそは我も下にこがるれ

板間より袖にしらるゝ山おろしに顔はれ渡る埋火のかけ

(万代)
(新勅)

埋火のきわぬばかりを頼めども猶しもさゆる床のさむしろ

(續千)

うづみ火のあたりは春の心ちし散てりくる雪を花とこそ見れ

(後拾)

埋火のあたりに冬は圓居してむつ語りすることぞ嬉しき

(堀百)

○神樂(かぐら)

神樂は宮中にては、十二月吉日を選びて、内侍所にて、御神樂行はる、例なり、神樂は本よりある式なるを、十二月と定められしは、一條天細の御代といふ、又宮中のみならず、諸社の御前にもありて、冬の夜は、庭火をたきて、其あたりに群れ居つ、琴笛をならし神樂歌を歌ひ舞ひ奏づるなり、さゆる霜夜に遙なる森の木陰に、神樂の聲する由をいひ、さゆる夜に、物のねの澄み上る様、又庭火の影も霜に白くる由、又霞亂れ雪ちりくる様をもよむ ●神樂の起りは、音神代に天照大御神、天の岩屋に籠り給ひて、世間常暗となりし時、諸神之を憂へて、様々の面白く樂しげなる事せしかば、岩屋戸開けて、再明なりきといふに因て、其事を傳へたり、かゝりければ天の岩戸も明けぬべしとも、歌の聲面白きは、天の岩戸や明けぬらむとも、星の光のすめるは、空やはれたるとも、庭火のあたりの霜のこけぬるは神の御心もかくやあらむとも、又朝倉かへしの聲をききて、終りになれる名残を思

ふ心などをよむべし、 ●朝倉の聲、赤星の聲、本末の聲、皆かぐらの歌物の名なり、玉篋うたふ、神樂うたふ、さゝ波うたふ、なごいふもこの類なり、

(語) かぐら 庭火 琵琶の音 笛のね 神代 御火

●立ちまふ かなづる うたふ

(句) 神取る 星うたふ 聲さむし 小忌衣 白木綿を どのよりの 山藍の 神垣の さかさ葉の 夜もすがら 置く霜の みてぐらは 年ごとに 八重神 里かぐら 八平手に 御火白し 笛竹の 本末の くら歌ふ 神あそび 住吉の かぐら 聲たかく 神わざを くりかへし 音づれて 追風に 吹きたつる 諸人の すみにけり 庭火たく 八幡山 小夜更けて 立歸る とりかざり 白にぎて 松の尾の あそびする 神のます さゆる夜に 少女子が 神もさぞ

●庭火の烟 あづまの調 しめの内人 歌ふ神樂 まゆみつぎ うたふ玉篋 庭火の前の うたふ神樂 よぶかさ空の 庭火の影に なびく木綿しで かぐらの庭に ふくる夜しるく 蘆枕うたふ 千年とうたふ ころづき 神のいさめを あけし岩戸の 八十氏人の

神代をかけて 残る月影 まさきのかづら 折返す聲 歌ふからかみ やまと琴のね 歌ふ聲より 赤星の空 絲竹の聲 かなづるきねの 森のしめ繩 嵐遙に 神さびにけり

神もみるらむ 火白くたけ 袖ふる程は 神の心も 立まふ袖の 霜夜ふけゆく 神の
 みまへに 朝倉返す 神代おぼゆる まどろせりけり 醒する森は 心すみてや 神も
 さくらむ 神の心を る今ロヤ 霜の月夜に うたふ宮人 醒通ふらし 手草の枝に うた
 へば明くる 絲竹のねも 月にすみけり 醒きこゆなり 人の心も 神さぶるまで 森の
 しめ細 明方のそら 醒を合する 夜はの絲竹 袖ふりかへす 袖まで磨く 冬の月影
 さぞ榮ゆらむ 霜さわ増る 山あゐの袖 うたふ庭火も あかぬ影哉 からかみの袖 う
 たふ聲には 心ひくらむ 色もかはらで いはひそめけむ 神をぞ祈る 神のみてぐら
 千万の神 さねつゝみうつ 神もうくらむ 神てふ神は 八十の諸神

(作例) 神葉や立ちまふ袖の追風になびかぬ神はあらじとぞ思ふ

さかさ取る庭火の原にふる雪を面白しとぞ神も見るらむ

神のます深山さかきに木綿かけてよはにぞいのる君の御代をば

あまとづる神の心をとる今日や庭火のけぶり雲となるらむ

曇りなく雲のよそにもさし哉すみのぼりける赤星のこゑ

(金葉)

(續詞)

(万代)

(堀白)

(万代)

○早梅

梅は春さくものとせるに、早きは年内 但し今いふ時は 新年になる也 より咲きそむるを早梅といふ、但し
 はやうめなど讀ます、其意を讀むべし、雪の内より且咲きて春待つ意、或は梅が香ばかりは
 冬ごもりせぬ由、又年の此方に咲くなど、他の花の無き頃なれば、珍らしき意によりよ
 し、猶春部の梅の詞見合すべし、●冬梅といふも、早梅と同意同じ、

(語) 梅が枝 梅が香 初花 一花 片枝 一枝

(句) 埋るゝ 匂ふなり いとゝ又 年寒き 且にはふ 雪の内に 春またで 冬ごもり

心あれや うぐひすも しらじな 年の内の 咲く花も 疾くさくも 日影さす 折る人も

人もみぬ 色も香も 咲きそむる 程近き 藍垣の ふるとしに 白雪も 春またぬ 紛

へども 梅の花 春よりも まつ匂ふ ふる雪は

●雪間の梅の 春の隣に さける梅が枝 梅の初花 花になりゆく 先さく梅の 思ひか
 けぬを 雪にまじりて 砌のうめの 花の初風 春のこなたに 匂ふ梅が枝 春をもまた
 で 急ぐ心は 春待つ園の 薫り出たる 先さきそめて 一木の梅の 梅もめづらし 冬
 ごもりせぬ 菊より後の 色香ことなる 春待つ花の 雪の下なる 春まつ色の 春をも
 またす ほゝるむ梅の 垣はの雪に 蕾みにけりな 春立ちがたに 成りやしぬらむ 冬
 をさかりに 梅ひらくなり 花の夕風 菊より奥の 木毎に雪は 花ともわかす かばか

りこそは 春も匂はめ ま近き春も 年のこなたに しるべはまたき 雪の かつもけな
む それとも見わす 春近しとて 枝もたわに

(作例) 山里のかき根の梅はさきにけり香ばかりこそは春も匂はめ

(千載)

花の色は雪にまじりて見わすとも香をだに匂へ人の知るべく

(古今)

いづれをかわきて折らまし梅の花枝もたわにふれる白ゆき

(新勅)

うぐひすの鳴ぬばぬばかりぞ梅の花匂ひは春にかはらざりけり

(續詞)

梅の花春より先にさきしかど見る人まれに雪のふりつゝ

(拾遺)

○歳暮 (としのくれ) 除夜

一歳の間なす事もなくて、早暮れぬる事を歎き、春くるは嬉しき物から、暮れゆく年の名残
惜く思はるゝ意、かき暮らす雪に道も迷はで、いづくに年の暮れてゆくらむと慕ひ、又ゆ
く年の道迷ふまで、雪もふらなむと願ひ、松伐る人の往來に春近きぬと驚き、又年のなご
りは、野山のけしき物さびしき趣などよむ、●皆人の春のいそぎとは、年の暮に何くれと
新年を迎へむの用意なり、されば行年もうしと思はむともよめり、●年なみとは、月なみ
日なみのなみなり、●年の それを波にとりなして、海邊水邊によせてよむなり、●年木こる

とは、新年に用ゐる料に薪を伐るをいふ、こるは伐るなり ●歳暮の歌は、學問する人などは、

まなぶとすれど、怠りがちにて徒に年のくれぬるに、今更驚く意をよめり、●除夜は十二

月晦の夜の事なり、歳暮は大方十二月廿日すぎより廣くいひて、除夜の意をもよむべけれ

と除夜と出たる題には、只その一夜をよむべし、たとへば今年も今日に限るとか、一夜は

かりの年とかよむべし、左には歳暮と除夜の詞を交へのせられれば其意して采るべし

(語) ゆく年 としのくれ

今日のみ くる、くれゆく すぎゆく をしむ こゆる さぐる

(句) くれてゆく とよめぬ とよまらぬ 春をまつ 今日のみと 年波の 年 くれ

ゆく年を つもる年 身につもる 行きめぐる ふる年の 今日のくれ み冬つき 春近

く 老の坂 年木つむ 門松を 道もなく 急ぐらむ 爲なれば 慕ふとて いづかたに

老にける はかなくて 惜めども なりにけり あけはてば 昨日といひ くれはてゝ

月日のみ 年くるゝ 限りありて いたづらに 今幾日 早瀬川 相山川の さらひする

さいはきな 行きめぐる 年 一年は かぞふれば

●年のをばりに 雪もわがみも くれぞ悲しき 人急ぐなり 逢はむとすらむ 流れて早

き 月日なりけり いそぐ年木を 年のくれ方 いとなみたつる 門松を 行く年の矢の

早さをぞ知る 年ふりこめよ 雪の白山 年は返らず 流るゝ水と けいげ けいげ とまりやは けいげ とまりやは
 する 年木こるべき 冬ごもりして 惜しと思ふまに 道ゆく人は 立ちもとまらで 日
 敷ぞしるべき 年のゆくらむ 送りむかふる 年のくれかな 道もさりあへず 年やゆくら
 む 年のくれこそ 程なかりけれ あはれ程なし 春のとなり の 事繁きよは 春にかへ
 らむ いそぐは春の めなれば いそなみもなし ふる年の内 今年も末の なごり 年を送
 りて 年のをだまき 年をくしみて 年のひかすは くるゝを急ぐ 身にそふ年の くれ
 ゆく年の 今年を急ぐ 春の近づく 春をむかふる 年のあくるを 松たてそふる さも
 いそがしき 年の別れを 年のかよひち しはすの月の あすの春をば こよひを惜しむ
 あけなばやがて 送り迎ふと 何いそぐらむ 冬の日敷は (月清)
 (作例) 行く年の宿はいつくぞ尋ねれば身より外にはとまらざりけり (續詞)
 くれてゆく年の姿は見わねども身に積りてぞ顯はれにける (新勅)
 飛鳥川かはる淵瀬もあるものをせくかたしらの年の暮哉 (月清)
 誰も皆なれにし年の過ぎゆくを送らぬ人はあらしと思ふ (拾遺)
 右 歳 暮 (六帖)
 數ふれば吾身に積る年月を送りむかふと何いそぐらむ (千載)
 くれて又あくとのみこそ思ひしか今年ほ今日ぞ限りなりける (新古)
 一年ははかなき夢の心ちしてくれぬる今日ぞ驚かれぬる
 石上ふる野の小笹霜をへて一夜ばかりに残る年かな

明治四十一年三月十日印刷
 明治四十一年三月二十五日發行

(定價金四十五錢)

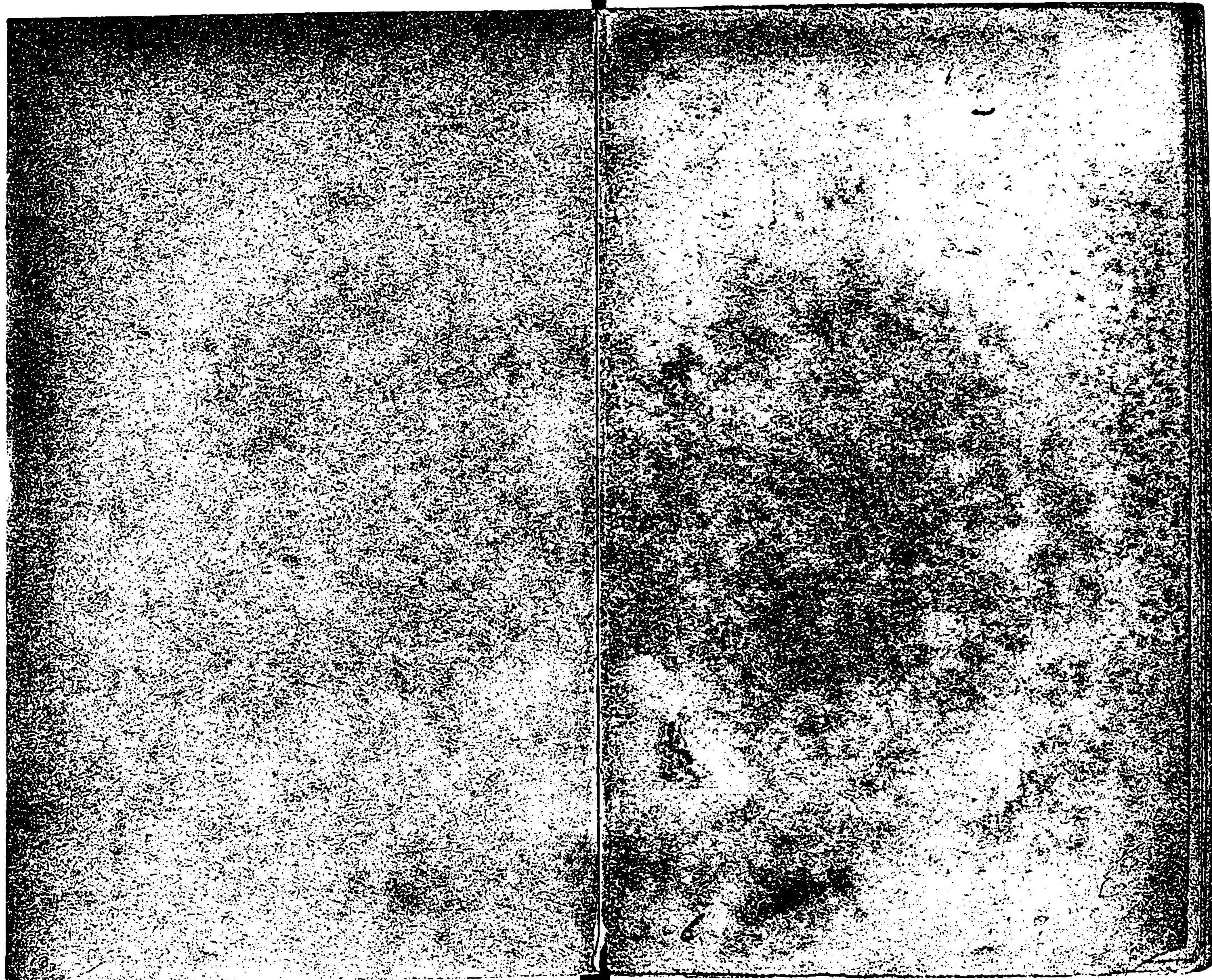
香川縣香川郡宮脇村三百二十一番戶
 寄 留

發行兼 赤松 立吉
 著作 者

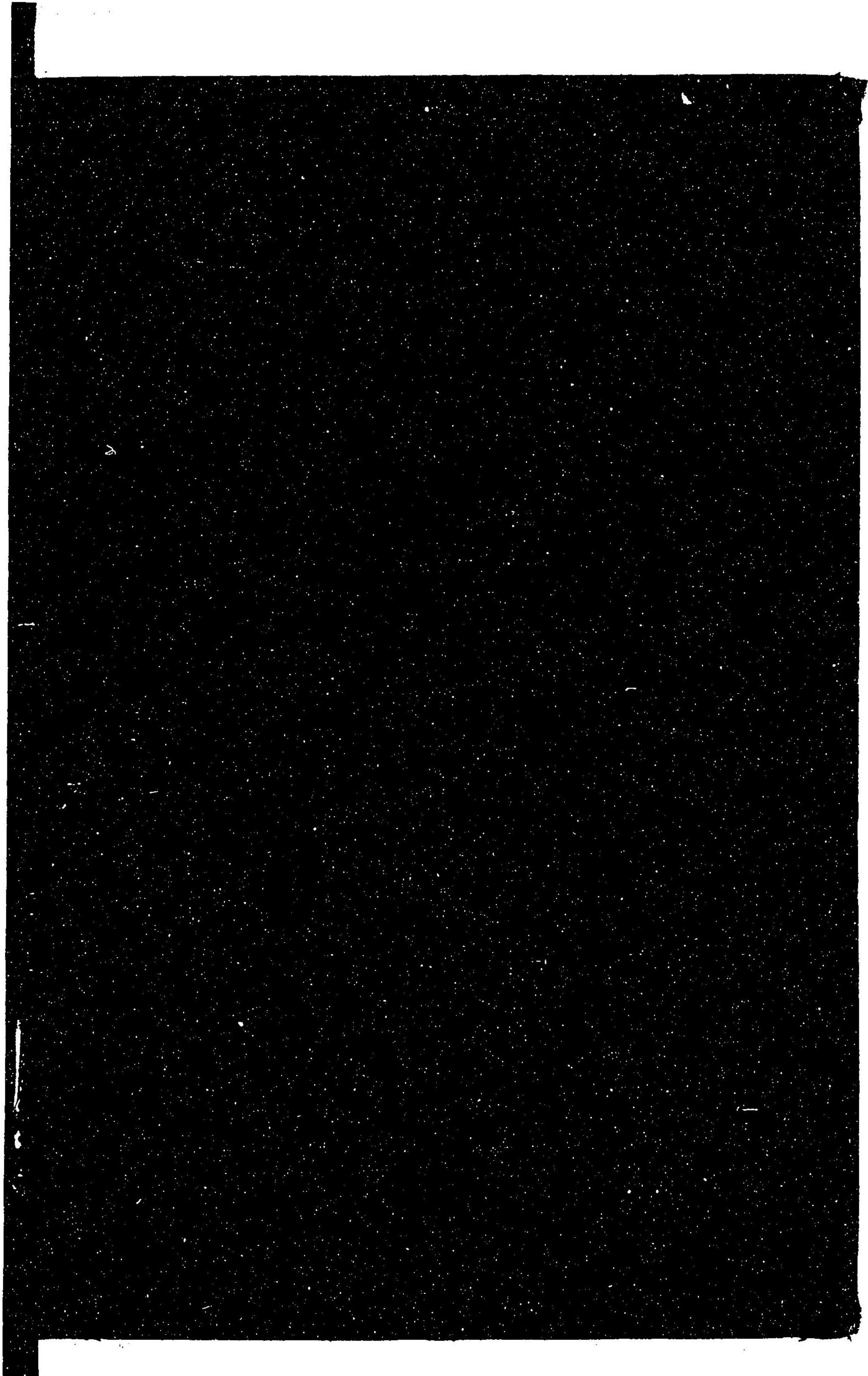
印刷者 森田文七
 香川縣高松市古新町百〇一番戶

印刷所 香川新報社印刷部
 香川縣高松市北龜井町イ三十五番戶

31
 478



31
478



31
478

086836-000-9

31-478

和歌捷径

赤松 玄吉/著

M41

DBD-2089



